

K子と俺の関係

牧草 泉



一、
ついに俺は自由の身になった。時節は春。刑務所前の桜が満開だった。何かしら気恥ずかしい気分だ。何か善行をした身であれば、桜並木もそれにふさわしいが、罪を償った身ではおよそ不似合いに思える。いささか恥ずかしい気分だ。

でも、刑務所がこの時期に作爲的に釈放を決めたわけではない。それは俺の意思とはかわりなしに、また看守の意思にも無関係に実現したのだ。つまり刑法によって自由の身になったのだ。「俺はまだ刑務所にいたい」と言っても追い出されるとのことだ。

じつは三ヶ月ほど前、所長から仮釈放の打診があった。仮釈放というのは刑期満了前にムシヨをでられるという制度である。しかし、仮釈放になったからといって、誰でも行く宛があるとは限らない。仮釈放にはまず定住場所が必要だ。仮に保護司に依頼して定住場所を決めても、いずれは追い出されることになる。定住場所を確保して、仮釈放

されたとしても、月に二回、保護司に顔を出さないといけないことになっている。俺には定住場所はある。しかし俺はいやだ。早く出られることはいいのだが、月に二回も保護司に顔を出さないといけないなんて、真つ平ご免だ。だから俺は断った。

なかには家族の出迎えを受けているのがある。しかしその家族も目立たないように、車をかなり離れた道の片隅に止めている。バスで来たと見られる出迎え人は、桜の木の陰に身を隠して、顔だけ出して身内の者をきよきよと探している。でも出迎えを受けた前科者は恵まれているといえる。まだ戻れる家庭があるのだから。でもそれが幸福な家庭であるかどうかは分からない。前科者を家庭が支えることができるかどうか？ おそらくいずれにしても悪戦苦闘の修羅場を迎えることは間違いない。これは同室のHが言っていたのだ。

「俺には家庭がある。だから出所しても戻る場所はある。しかしそれが果たしていいのかどうか？ 俺には疑問だ。俺としては一切しがらみのない状態のほうがいい」

「じゃあ、家庭を捨てたいのかね？」

「そうだな、あんたのようにね」

「なぜだ？」

「だって自由があるじゃないか」Hは睨みつけるようにして俺に言ったものだった。そうしてぼつりとつぶやいた。

「お前がうらやましい」と。

そう言われても俺は自分がHより幸福だとは到底思われなかった。でも、Hの話には理解できる場所があった。

Hの話からすると、出迎えがあったそのシーンだけが、しかも第三者から見ると幸福だ、と言うべきかも知れない。というのは出迎えそのものも、それは自分が背負っていかなければならない過去であることは間違いないのだ。

三食食うことには困らないだろう。世話をしてくれる人がいるのだから。でも心の重荷がなくなるはずはないのだ。第一遊んで暮らせるはずはない。しばらく休養できたとしても、それほど潤沢に金を持っているわけではない。だから、いずれにしても働かなければならない。結局刑務所を出て、一切の過去を捨てて新しい人生をスタートさせるという者は誰一人としていないだろう。前科者は重い過去を背負ってのスタートなのだ。

しかし、なかにはこんな奴もいる。俺の右隣の監房にいた年配のMは刑期満了が近づくにつれて浮かぬ顔に変わっていた。朝の運動の時間に「あんた、もうすぐおさらばできるんだらう？」と言うと、彼は、「うん、そうなんだけど、出所しても行くところがないんだ」と元気がなかった。彼は刑務所を出たり入ったりしている人物だった。

結婚もしたことがない。どうやら刑務所で残りの一生を送ってもいいという心境のようだった。人間誰しもだが、歳

を食つてくると次第に誰からも相手にされなくなる。これはよほどのことがない限り例外はない。特に前科者だと例外はまったくないと言っている。

これって刑務所を一度でも経験すると痛いほど実感できる。何も説明は要らない。だからMとても娑婆に出ると、自分ひとり生きて行かなければならない。ところがまず仕事がない。前科者と分かつていて採用する事業所なんかあるはずはない。さらに、Mのように技術も資格も持たず歳を食っていると使い道がないのだ。臨時の道路工事人夫や建設作業現場の土方があればいいほうだ。まさに「土方を殺すにや刃物は要らぬ、雨の三日も降ればいい」、これだ。だからそれほどの収入がえられるわけでもないのだ。

それともう一つ正業に付けない理由がある。前科者がすべてそうだとはいえないが、大半は他人から束縛は受けたくないという本能的な願望があるということだ。だから、気に入らないと、すぐに仕事場を辞めてしまう。初めから職につかずゴミ箱あさりでその日暮しをする者もいる。

この意識は前科者特有のものというわけではない。芸術、文学、政治あるいは経済の分野でもいえる人間の普遍的意識といえるだろう。特に芸術関係では多いと思う。絵さえ描ければいいとか、ピアノさえ、ギターさえ弾ければいいなどの類だ。彼らが成功するつまり世間に名の知られたエンジニア・ティナーになる確率は、限りなくゼロに近いといっ

し、さらには五百円宿もある。いくつかの福祉法人が出所に就業を斡旋しており、さらに宗教関係の団体の慈善事業で炊き出しもある。一日働けば何がしかの金をもらい、そのうちから宿泊代と食事代を差し引いて、残りが雑費ということになる。

釈放されたからといって俺は高揚しているわけではない。これからはムシヨの世話にはならないようにしようという思いがあるだけで将来の設計はまだない。だから、娑婆に出てきて空気を大きく肺へ吸い込んで、「娑婆の空気が新鮮だ」とは思っても、すがすがしい思いになることはない。とはいえ、浮世は塀の中よりはましなことは確かだ。その点は俺も認めたい。

一緒に出所した窃盗犯のKはともうれしそうにしていたが、あいつは累犯で、おそらくまた窃盗をしかせてお世話になるはずだ。というより、自ら望んでムシヨ入りをするんだらう。

俺がムシヨに入る前に、取り調べていた刑事が、ポツリと漏らしたことがある。「昨日取り調べたのは女だったけど、再犯だった。再犯は普通アウトなんだが、微罪でたぶん検事が起訴猶予にするんだらう。しかし、次回めつかれば、豚箱確実だな。女の窃盗は病気なんだよ」でもなぜ俺と関係のない女の窃盗犯のことを言ったのか、今でも分からない。女の悲しい人生を思つての歎き、同情だったのか。

いいだろう。それでも自由が欲しければ、自分の道を行く以外にないのだ。

前科者については、これに加えてというか付随してというか、公的補助、救済を受けたがらないという傾向がある。つまり生活保護制度からの逃避である。なかには詐欺まがいのことをして生活保護費の支給を受ける者もいると、新聞が報じていたが、それは例外に属すると思う。要するにムシヨ暮らしの経験のある者は、自由の束縛を嫌うものが多いことは事実だ。もつとも、だから犯罪に走るんだというとも言えるのだが・・・。

生活保護を受けるにはいろんな条件がある。さらに受給後の束縛も心の重荷になる。やはり自由が侵される。だから結局、ゴミ箱あさりへと流れていく。要するに、ゴミ箱の残飯をあさつても生活保護は受けたくないというのが多いのだ。

俺だって例外ではない。俺も今は若いからそんなことは現実にはありえないが、歳をとつた場合のことを考えると、やはり生活保護を受けるくらいなら、街のゴミ箱をあさつて、あるいはコンビニの期限切れの残飯で糊口をしのいだほうがいいという思いがある。

大体出所する者で、戻るところがある者は少ない。かなりの数の者が、大阪の西成区へと流れて行く。ここは釜ヶ崎という名称で全国的に有名だが、ここには千円宿がある

あいつは男だが、今度で五回目のムシヨ行きだった。あいつも窃盗は病気なんだろう。このままでは六犯確実だ。本人も娑婆の空気を精一杯吸い込みながら、ぼつんと俺に問いかけるように言つたっけ。

「俺の盗癖は病気なんだよな。この病気を治してくれるところってないんだ。だから娑婆へ出ても、しばらくわらじを履くって感じだな」

「じゃあ泥棒しないで働けよ。そしたらもう刑務所とは、おさらばだよ。働けば窃盗の病も治るさ」と言つたら、「お前はこの病気が分かつていねえんだよ」と不服そうな表情をした。

俺が入っていたのは大阪市の近くにあるY刑務所である。収容者数は二百六十名だそう。みんなで顔を合わせることもないから、そういわれたって実感が湧かない。大規模私立高校の生徒数と同じだと言っていたのがいたが、これは学校で校納金をネコババした元高校教師の表現だった。「私は賭け事になると目がないんだ。給料だけでは賭け事は出来ない。だから校納金に手をつけたんだ」と言っていたが、賭け事も女の窃盗癖と同じなのか、と思つたことだった。大学も、そこそこの大学を出ていた奴だったが、夜間高校を出て、倍率〇・八倍の夜間大学しかでない俺からすると、うらやましい限りのお身分だと思つただが・・・でも、校納金をくすねれば、お縄頂戴となるこ

とぐらいは、大卒なら十分に分かっていたんだと思うのだが、やはり魔が差したのか。

給料もほどほどにはもらっていたんだろうし……。それなりに平和な生活が出来たんだから、他人の金をくすねなくとも、それでいいじゃないかと言いたくなる。俺からすると、その心理は、まったくもって分からない。

日ごろから俺と相性がよくなかった副看守長が、突然俺に近づいてきて、「もう俺の顔を見るようなことはするなよ」と肩を叩いた。目の前に俺を圧迫するように突っ立って言った。彼としては入所中じめじめと俺をいじめてきたことの罪滅ぼしだろう。こいつには必ず娑婆で復讐してやると、思い続けてきたのだったが、その一言で彼に対する恨みがスーッと消えていくのが分かった。

俺は「何だ？ お前の復讐はそれほど単純だったのか。あいつから散々いじめいびられてきたお前じゃないか。それを一声掛けられただけで帳消しにするのか？ 実に女々しい奴だな」と自分自身を炊きつけてみたが、まったく復讐心は膨らまなかった。俺は同室の者と副看守長のことでの次のような会話のやり取りをしたことを思い出した。

「あいつは俺ばかり付け狙っている。俺が真から嫌いなんだろうな。殺してやりたいぐらいだ」俺は相手が慰めてくれるものと思った。しかし彼は「あれっ、それって本当かね？ 俺から見ると、そんなことはないぞ。俺からする

と、お前を依怙贖しているように見えたぞ」という意外な返事が返ってきた。俺はあわてた。彼は言った。「思い過ぎだ。気にするな」俺は彼の言葉に不満だったが、抗わなかった。副看守長への怨念は消えなかったが、彼に対してはそんな見方もあるのかと思つたことだった。俺の副看守長への恨みが軽減したのもこの彼の一言が記憶に残っていたからかもしれない。

誰も迎えには来なかったが、それは幸いなことだった。もしも誰かが迎えに出てきていたら、俺はそれに我慢できなかっただろう。いや我慢と言うより、負担に感じただろう。もちろん俺が知る限り、俺の出所を待ちわびている人間も、俺を出迎えてくれるのを期待した人間もいなかった。とは言いながら、ふとあの女の顔が浮かび上がったことも事実である。

二.

出所も間近に迫ったとき、看守から「面会人が来てるが、どうする？」という連絡があった。名前を聞くと、G・K子だという。俺はびつくりした。女が面会に来るなんて思つてもいなかったんだ。ふと会うべきか会わざるべきか逡巡した。看守は早く返事をしろという表情で迫ってくる。俺は会うことにした。なぜって？ それは分からない。ヒラリー卿と同じ、「そこに女がいるから」だった。

なにか俺に親しみを感じたようだった。

「じゃあ、一時間一万五千円、いい？」K子はため口で言った。俺は「いいよ」と言った。ポケットに三万円あることを確認したからだだった。

背中を流すK子に俺は尋ねた。

「さつき、なんで俺を睨んだんだ？」

「ああ、あれ？ 自分でも分からない。でも以前に私を捨てた男を思い出したの。少しあなたが似てたからなのよ。だからふと憎しみが生じたの。でもそんなに睨んだ意識はないのよ」

睨んだんだ？ とは俺が大げさに言っただけだ。俺はその女の目に情を感じたのだ。俺は黙って頷いた。

女を抱きしめると、女は言った。「ゴムはめてね」俺も異議はなかった。やはり、ソープランドでは性病が怖い。罹患すると後が面倒だ。そんな俺の心を読んだのか、女は抗議するように言った。

「私って病気はないのよ、絶対に」最後の「絶対に」を、俺に言うのではなく自分に言い聞かせるように言った。

俺は女に満足した。俺が帰るといっているとK子は玄関までついてきた。

「あんた、通りに顔を出すと知り合いに顔を見られるぞ」とからかうと、

「平気なの、出身は遠くなんだから。知り合いって誰もい

K子と出会つたのは、ソープランドに行ったときだった。俺が妻と離婚して家を出てから半月ほど過ぎていた。別れると決まった時、妻は「私たちがここで生活したい」と言った。俺は家を出た。そうして大阪へ出てきた。西成区で二LDKのアパートを借りた。

ぼつねんと一人で暮らしていると、やたらと性欲が湧いてきた。俺は夜を待つて隣の町にあるソープランドに行った。「フラワー・ポット」というネオンが瞬いていた。受付の女が「ご指名の子いますか？」と聞いた。俺は「誰でもいいよ」と言った。受付の女が内線ですべて女を呼び出した。出てきたのがK子だったのだ。

K子は俺と目が合うと、そのまま動きを止めた。俺はあわてた。「なぜ、俺をそんなに見つめるんだ？」そういう表情をしたと思う。どれほど時間が過ぎたのだろう。俺には五分も、十分も過ぎたように思えた。でも、実際はほんの三十秒ぐらいだったんだろうと思う。

彼女の表情が和らいだ。女が尋ねた。

「どうします？ いろいろ段階があるんですけど」

「あんたのいいようにしてくれ」俺は思わず言ったが、お金の持ち合わせはあるのかな？ と、ふと心配になった。俺は彼女の後姿を見ながらポケットをまさぐった。俺のポケットを探る様子をちらつと見てK子はニコツと笑った。

ないよ」と、とたんに女の口調が一段とため口になった。

女が「遠くなんだから」と言ったので、俺はふと興味が出て「出身ってどこなんだよ？」と尋ねた。というのはいくらもソープランドに身をおいているにしては、K子の表情がなんとなくその場に収まっていなかったからだ。

「秘密なの、あなたが言いふらしそうだから」

「秘密は守るよ。俺は口は堅いんだ。どこなんだよ？」

「じゃあ、私の出す条件をあなたが飲めば教えてあげる」

「どんな条件なんだよ？」俺は少し不安になって尋ねた。女の条件を断ることが俺にとっては屈辱的に思われたのだ。断るくらいならその条件は聞かないで済ましたほうがいいと思っただけだった。

「条件ってね、難しくはないんよ。あなた、外で私と会って欲しくない？」

「それが条件？」俺は「なーんだ」と思った。心配する必要なんかなかったんだ。俺はほっとした。実は俺は小心者だ。いろいろな人が言ったことが気になるほうだ。女が難題を持ち出して、俺がそれを断るシーンを思い浮かべていたのだ。

「いいよ」と、俺はちよつと戸惑いながらも承諾した。「でも、理由は何か？ まさかヒモつきじゃないんだろうな？」俺は念を押した。

「ヒモ？ そんなのはいないわよ。私っていつも一人なん

よ」

時々、女から誘われて外で会って、女についてきたヒモから絡まれて、金をふんだくられたという話を聞いたことがあった。だから女に尋ねたのだ。しかし、ヒモがいても「私にはヒモがいるのよ」などと言う女はいないだろう。俺はとんだ愚問を発したなと自分を恥じた。でも俺を見つめる女の表情に変化はなかった。だから、俺はそれ以上糾さなかつた。ヒモはいないと俺は見たのだ。

そういう問いを発しながらも、俺は女の射るような眼差しの中に淡いゆらめきを読み取って安心していたのだ。そのゆらめきは何を意味するのか、俺は家に帰る道すがら考えたが答えは出なかつた。ただ一時の性的愉悦を二人で楽しんだに過ぎない。要するに単なる取引でしなかつたのだ。女と男の視線が合うのは何も特別なことではない。日常ありふれた事象だ。だからそこから何かが生まれるとは俺は思わなかつたのだ。

俺は女が指定したレストランに行った。女が指定した時間は十二時三十分だった。女が働いている風俗店の「フラー・ポット」からそれほど離れてはいなかつた。

女がコーヒートを注文した。「コーヒーでいいでしょ？」女は念を押すように言った。俺は注文してから聞くなんて意味がないじゃないか、と思っただけ、別にコーヒーが嫌いなわけでもなかつたから、黙って頷いた。

「俺が店であんたに尋ねたんだから、あんたが答える番だよ」というと、「うん、分かっているわよ」と、女は納得顔で頷いた。女の表情は夜の店の部屋で見た感じより、清楚に見えた。またあの睨みつけるような眼差しは、今はなかつた。女の瞳は澄み切っていた。ふと俺は女から目を逸らした。女が普通の女性に見えたからだ。

「私ってね、出身は佐渡なのよ」

「新潟の、あの佐渡おけさの島？」

「そうよ、金山記念館の近くの。相川ってところなの。聞いて安心した？」

「うん、まあね」

「あなたって人の過去に興味があるのね。どうして？」

「どうしてって、誰だってそうだろう？」

「でも私はあなたについては、どこの出身？ だなんて聞かなかつたわ」

「それって本当だとすると例外だ。珍しい存在だよ」

「そうかもね、でもね、今のあなたでいいと思っただから、別に過去なんか聞く必要はないのよ」

「じゃあ、どこの出身でも、どんな過去をもっていていいってことか？」

「そうよ、そんなことどうだっていいじゃん。かえって過去を知ったりすると評価が変わって、どうしよう、ってことになるわよ」

俺は話題を変えて、再び女の過去について尋ねた。

「佐渡からわざわざ何で大阪に出てきたんだよ？」

「それって、島から出て来たらいけないっていうの？」

「・・・」俺は沈黙した。俺は女の過去を知りたかつたのだ。でも女の目は明らかにそれを拒否していた。女はぼつりと言った。

「人間って知らないでもいい過去、知ってはいけない過去があるのよ」

それって自分への言い訳なのかと尋ねたかつたが、なぜかその意欲が失せた。結局それ以上女の身元については分からずじまいだった。二人の間の雰囲気はそれを拒否していたのかもしれない。

俺はその後のこの女の常連になつた。ただ、俺が女にとって上客であつたかどうかは分からない。チップを弾んだこともないし、特別に優しい言葉をかけたこともないんだから。そうして時々レストランで会つた。俺が求めたのではない。女のほうに要求した。女もそのことを意識していたのだろう。時々入店料を受け取らないことがあつた。俺もお金が潤沢にあるというわけではない。少し自尊心が傷ついていたが、俺は女の言うとおりにした。

また、俺にも「お前が希望するから会ってやっているのだ」という意識があつたのだろう。それでも俺が、女の会いたいという要望を断らなかつたことも事実だ。「お前は、

なぜ会うことを拒否しないんだ？」と自問したこともあった。でも答えは出なかった。

女は俺が席に座るとにこつとした。俺は少し戸惑いの表情をしていたと思う。別に怒っていたわけではないが、女が面会に来るなんて思ってもいなかったのだ。どんな表情をしているのかわからなかったのだ。女が声を掛けた。「元氣？」俺は頷いた。

「満期まであと何ヶ月なの？」

「四ヶ月さ」

「もう少し我慢するのね」

「あんたはなぜ俺に会いに来たんだ？ 来る理由ってないよ。全く赤の他人だし。よく許可が下りたな」

「理由？ 理由は大有りじゃない。あなたがここにお世話になる原因が私にもあったんだから。私って、あなたがしでかしたあの事件の関係者なのよ。しかも加害者とは知人なんだからね」

「それって関係ないよ。あんたにはね。別に直接の原因というわけではないんだ。血縁の関係もないしね」

「それはそうだけど、でも、簡単に許可が降りたことは事実なのよ。現に私がここにいるじゃない？ だから担当者も私を事件の重要関係者と認定したのよ。あなただって、私に会うことに抵抗がなかったから、面会室に来たんでし

よ？」そう言われて俺は沈黙した。女の態度は横着だと思っただが、女が今ここにいることに対して別に違和感を持つなかつた。

以前は単なる知人という関係では面会は拒否されることがあったが、現在は比較的その制限は緩やかになっていると同室の者から聞いたことがある。

「今もあの店にいるの？」

「あの店？ 辞めたのよ。今はね、知人のついででレストランで働いているの」

俺は、女が差し出した店の名刺を受け取りながら、風俗店を辞めたと聞いて何かほつとした。それは俺も不思議だった。女はただの行きずりの女でしかない。女の行動は自由だ。女の行動範囲外に俺は位置している。オーバーラップした領域もないのだ。それなのに、なぜこの安堵感がでるんだ？ 俺にはわからなかった。俺は言った。

「もう帰ってくれよ、話すことなんかないよ」

俺は心の中を覗かれたくなかつた。

「まだ十五分あるわよ。せつかく来たんだからいいじゃないの。あなただって、所内よりましじゃないの？」

女は立会いの看守に声を掛けた。

「時間はあと十四分あります」看守は低い声で言った。

「一時間希望したんだけど、今日は面会人が多いからつて四五分に端折られたのよ」

「話が切れたのに、顔を合わせていたって意味ないよ。帰ってくれよ」

「あら、意外と頑固なのね。いいわ、帰るわ。うん、出所するときは迎えに来てもいいわよ」女は明るい声で言った。

「いらぬおせつかいだ、ほうつておいてくれ。あんたとは関係ないよ」

俺はイライラして少し声を荒げて言った。立会いの看守が席からちよつと背を曲げて俺を覗き込んだ。しかし何も言わなかつた。規則の限度内と見たのだろう。俺の突き放すような言葉にも関わらず、女は俺の顔から目を離すことなく立ち上がった。女は微笑んでいた。俺の表情から何を探り出したのか？ 女の満足そうな表情を見て俺はイライラした。でも俺はそのイライラが女に対する嫌悪から発したものでないことを知っていた。

三.

俺は大通りへ出た。その先に繁華街があつて、いつも朝の十時を過ぎると賑やかになる。人々は十時を待ち構えるようにして街にやってくるのだろう。そうして夜も終電車近くまで人で込み合っている。今日も例外ではないのだろう、と俺は思った。俺は背後に人の視線を感じてふと振り返った。

周囲を見渡したが、誰も知った顔は見当たらなかつた。

気のせいだったのだろうか。そう思いながらまた歩き始めた。昼が近いせいだろうか、通りは賑やかだ。アパートに戻ることも考えた。しかし、六畳と四畳半のアパートに戻っても、あの閉塞した空間を思い出すと足が重い。俺は一休みするために目の前に現れた小さな公園に足を踏み入れた。女性が三人、子供をあやしている。いずれもよちよち歩きた。女性の表情はいずれも幸福そうだった。俺はベンチに座つて母子の遊びを眺めた。あの三組の母子は知り合いないらしい。それぞれに引力の働きはしない。

俺にもああいうよちよち歩きの時代があつたんだと思うと複雑な気持ちになつた。全方位の可能性を持つ子供時代。成長するにつれてそれがベクトル化していく。この視野が次第に狭くなっていくのを、俺はいつ気がついたのだろう。小学校五、六年生の時はもう気がついていたと思う。父が病に倒れ、母が働き出したとき、自分の人生は容易ならぬ事態になつたことを知つたんだから。

突然肩を叩かれて、俺は驚いて振り返った。そこには女の顔があつた。にっこり笑っていた。俺は立ち上がった。

あのソーブランドのK子だった。

「あんた、何でここにいるんだよ？」

「刑務所からずーとあなたをつけていたのよ」

「・・・」

「あなたが出所するというから迎えに行つたのよ」
 「なんで、刑務所の前で俺に声をかけなかつたんだ？」
 「それって、あなたの後ろ姿には、なにか誰も受け付けない雰囲気か漂っていたからなのよ」

俺はそれ以上問い詰めなかつた。「それってどんな雰囲気なんだ？」と、理由を聞きたかつたけど、その気持ちが萎えた。俺はその気持ちが萎えた理由を自分自身に尋ねたかつた。しかし、とんでもない返事が返ってくるのが怖くて沈黙した。あの時、俺はK子のことを思い浮かべていたのだ。

「これからどうするの？」

「アパートへ帰るんだ」

「アパートは確保してたの？」

「うん、家主さんがいい人でね、家賃さえ払ってくれば、出所するまで確保しておいてやるって言ってくれたんだ」
 「そう、よかつたわね。でも働けないのによく家賃が払えたんだね」

「家主が未払いは後で払ってくればいいからって言ってくれたんだ。俺はそろそろ帰るよ」

「あら、冷たいのね。お昼まだでしょ？ 出所祝いに、私がおごるわ」

俺は女の顔を見た。その表情にソープランドの雰囲気はなかつた。俺は女から目を逸らして外に目をやった。繁華

街だけに人通りが多い。また三時だというのに、と不思議

に思った。年寄りと若者はいいとしても働き盛りの男がこんな時間に繁華街を歩いているのは信じられなかつた。失業者なのか？ 会社をサボって遊んでいるのか？ どう考えても不思議だつた。そうしてふと思つた。俺だつて他人から見れば「あいつ若いくせに、なんでこんな所を歩いているんだ？」と訝られているんだろう。

K子は、俺を振り返ると、こじんまりしたレストランを指さして言った。

「ここがいいわよ。ここのランチっておいしいのよ」

俺は頷いた。俺としてはどこでも、なんでも良かったのだ。いくら空腹の腹になにか詰め込めばそれで足りたのだ。K子は向かい合わせの椅子に座ると言った。

「何を食べる？」

「そうだな、インドカレーにしようかな」

「じゃあ私はスパゲッティにするよ」スタイルのいいウエイトレスが注文を取っていった。俺はK子に尋ねた。

「あなたは、迎えに来てくれたのはありがたいけど、俺には迷惑なんだ。煩わしいんだ」

K子はニコツとして答えた。

「あら、そんなに煩わしいの？ 知らなかつたわ。あなたが嫌なら、私はいつ去ってもいいのよ。別にストーカーじゃないんだから」

「そうか、じゃあ飯食つたら、俺はアパートに帰るから、ほつといてくれ」

「わかつたわ、じゃあそうするわね」

K子は明るく答えた。俺はK子の顔を見たが、それほど変化は見られなかつた。俺は安心した。けれども安心すると同時に、ふと寂寥感に襲われた。俺は慌てた、そんなはずはない、単なるソープランドの女じゃないか。どうってことはないんだ。単なる偶然の出会いで接しただけなんだ。お互いに人生の旅人なんだ。行き交う人に過ぎないんだ。俺は強くそう思い込もうとした。でも何か心の隅に沈殿して、溶解することがなかつた。インドカレーは美味しかった。ムシヨから出たばかりだからだろうか。今までインドカレーを食べたことがなかつたからなのか。香辛料が好みにあつたのだろうか。

「インドカレーってね。牛肉が入ってないのよ。だから私はイマイチなのよ」

K子が俺の顔をジーツと見ながら言った。俺は返事をしなかつた。

俺はレストランを出るとK子に向かつて言った。

「じゃあね。俺は帰るよ」

「そうお、じゃあ、あなたも元気でね。あなた、いい人だね。私はあなたが好きなの。なぜかかって聞かれても分かんない。だから迎えに来たのよ。恨まないでね」

K子は一瞬悲しそうな表情を見せた。俺はどきりとした。それはわかつていたことだつた。刑務所に面会に来てくれたし、釈放される俺を迎えに来てくれたんだから。いや、それ以前に、風俗店の部屋を出るときに上着を着せてくれるK子の横顔からも。でもダイレクトに面と向かつて言われると、俺は慌てた。

俺は何も言わないで歩き始めた。通りは人いきれがするほど混んでいた。俺は銀行の角を曲がる時振り返つた。通行人の切れ間にK子の姿が見えた。俺はふと立ち止まつた。突然、K子がぐるりと振り返ると、俺が見ている事を知っていたかのように手を振つた。俺は手を振って返さなかつた。でも俺は立ち続けた。K子はまた背を向けて歩き始めた。俺も歩こうと思つた。でも足が動かかなかつた。俺はK子の背中を見続けた。突然再びK子が振り向くと手を振つた。そうしてK子の姿は消えた。

俺はようやく歩き始めた。俺はK子がくれた名刺を取り出してみた。「レストラン・スカイラーク」俺はヌード喫茶を頭に浮かべた。ソープランドで働く女が、普通のレストランで働くことはおよそ連続性がなかつた。K子の顔がふと浮かんで消えた。その表情にはソープランドの雰囲気はなかつた。普通のレストランに働く女の子の表情と変わりがなかつた。K子の「ゴムをはめてね」という声が異端に聞こえた。

俺は、ふと、初めて女を知った夜のことを思い出した。K子と女の顔がオーバーラップして頭に浮かんだ。二人は全く同じ表情をしていた。

四.

ある日、俺はどうしても我慢できずに夜の街に出た。赤ちようちんの前で盛んに客寄せをしている女たちを一人一人眺めた。「俺の好みにあった女はいないか」と思つて物色したわけではない。声をかける勇気がなかっただけだ。俺の心臓はドキドキしていた。「この女たちの誰かに声をかけなければ」と思いながら逡巡していたのだ。その通りを行きつ戻りつしながら時間ばかりが過ぎていった。俺はついに思い切つて一人の女に声をかけた。俺の声は震えていた。自分でもそれがわかつた。その女が美人だつたというわけでもない、気が合いそうだからと思つたからでもない。単に偶然にそこに女がいたというに過ぎない。女はにっこり笑つたと歩き出した。そこは小さなホテルだつた。部屋に入ると、女が言つた。

「あんた初めてでしょ？」俺は頷いた。

「だからホテルにしたのよ。私の言う通りにするのよ。いいこと？」

「うん」俺の声はかすれていた。俺はすぐ女にゴムを要求した。女は言つた。

「その検査つて痛いんですか？」

「いや、血液検査だから痛くはないよ」

「検査料金は高いんですか？」

「うん、そうだな、一万円内外だろう。自分で試料を採取して検査所に送る手もある。これだと割安になる。しかし病院での検査の方が安心できるぞ」

「性病に罹患したら、治療費はどのくらいかかるんですか？」

「そうだな、淋病は抗生物質を打てばすぐに良くなるが、梅毒はそう簡単にはいかないぞ。友人の医者によると、治療が遅れると完治までの期間は長くなるということだったな」

先輩は性病は他にもいろいろあるとその恐ろしさを温言を傾けて言つた。俺はそれを聞いて、絶対に性病に罹つてはいけないという思いを一層強くした。

もし、罹つたら治療費はどうするんだ？ このことが真つ先に思い浮かんだ。女は俺が疑っている様子を見て悲しそうな表情をした。

「絶対に大丈夫だつて」女は抗議するように、射るような眼差しをした。その顔は今にも泣きそうだった。俺は女の思いつめたような表情に動揺した。俺は女の言い分に負けそうになつた。俺は俯いた。そして先輩の声を打ち消そう

「あら、用心深いのね、あんたつて」

「病気が怖いんだ」俺は率直に言つた。すると女は「私なら、心配いらないよ」

「どうしてだよ」

「だつて病気なんか持つてないよ」

俺は女の顔をまじまじと覗き込んだ。女の表情から嘘を読み取ることはできなかった。俺は少し安心した。でもすぐに先輩の忠告が頭に浮かんできた。

先輩は酒をちびりちびりと飲みながら教諭するように言つた。

「いいか女を街で買う時はだな、必ずゴムをはめるんだ。でないと病気をもらつたら。大変だぞ。淋病は罹患してから三日もすれば症状が出てくる。飛び上がるほど痛くて膿が出てくる。だから遊んでから一週間たつても異常がなければ、淋病には罹らなかつたと思つていい。梅毒は三週間の潜伏期間がある。三週間ほどすると血液に症状が出るんだ。痛みはほとんどない。自覚症状もない。後になってペニスに赤いコブのようなおできができるが、これも放つておくとやがて消える。だから厄介だ」

「じゃあ梅毒にかかつたらどうすればいいんですか？」

「赤いおできができるまで待つわけにはいかないから、三週間ほど過ぎたら病院で検査してもらうんだ」

とした。その時間はとても長く思えた。しかし先輩の声は消えなかつた。俺はゴムを要求した。女の目から涙がこぼれた。「あんた、私を信用しないのね」女は深いため息をつくとき、鏡台からゴムを取り出した。

女は強く俺を抱きしめた。女の甘い香りが俺の全身を包んだ。俺も女を強く抱きしめた。女は俺の胸から顔を離すと俺の頭をかき抱いた。女は呟くように言つた。「私の言つたこと、本当に嘘じゃないのよ。信じてね」俺の頬が女の乳房に触れた。乳房は真綿のように柔らかかつた。女の慟哭する息遣いが胸に伝わってきた。俺たちは何も言わずにいつまでも抱き合つていた。どこかで時計の秒針の音が聞こえた。俺は女の善意を裏切つたことを少し恥じていた。だからといって性病の恐怖心は消えなかつた。

女はさつき言つたことをまた繰り返した。「私の言つたこと嘘じゃないのよ。信じてね」俺は頷いた。女はまた涙を流した。俺はハンカチを取り出すと、女の涙を拭いてやつた。「よかつた？」女が耳元で尋ねた。俺はうなずいた。女の目からまた涙が溢れでた。

女はホテルの前で見送つてくれた。俺は女の泣き顔を見なくなかつた。だから振り返らなかつた。でもこれは嘘だ。女の姿がショウ・ウインドウに写つていて、俺はその姿を見ながら立ち去つたのだから。俺は何か女の真心を踏みにじつたような後ろめたさを覚えながら繁華街へ出た。女の

悲しげな顔がいつまでも脳裏に残った。

俺はこの経緯を友人に話した。彼は暴力団の下働きをしているという噂があった。彼は俺の話聞いて呆れた顔をした。

「お前、結局は女を泣かせて終わったんだな」

「うん、そういうことになる」

「お前は馬鹿なことをしたんだなあ」

「どうしてなんだよ？ 性病を貰ったら、お前ごとするじゃん」

「それはそうだけど、お前の遭遇した状況では、女の言うことを信じるべきだったと思う」

「どうしてだよ？ 病気を貰たないって証拠はないんだぞ」

「そりゃあ、そうだろうよ。別に女が性病ではない証明書を持っていくわけじゃないからね。でも、その女は嘘は言っていないかと思うよ」

「どうしてそんなことが言えるんだよ？」

「実際に性病にかかるかも知れない、と思う環境であったら、お前がゴムを要求しても女は何も言わなかったはずだ」

「でも、誰が見たって、売春婦としか見えなかったんだぜ」俺は強く彼に抗弁した。

「でもなあ、ひよっとしたら、居酒屋の単なる呼び込みだったかもしれないぞ」

「じゃあ、その女は客の呼び込みだけに立ちんぼしていたっていうのか？」

「そういう可能性もあるぞ」

「そんなことありえないよ」

俺はその時のシーンを思い出して言った。

「自信ありげだな。でもな、病気を持っていなかったことは確かだと思うね。だってお前を見れば、すぐに初めてだつてことがわかるんだ。初めてだという男に、そんな危ないことは、女つてさせないぞ」

「・・・」

「お前ホテルへ行ったんだろう？」

「うん、女が連れて行ったんだ」

「お前はホテル代払ったんだ？」

「女が払ったよ」

「じゃあ、お前が初めてだつてわかったから、女がサービースてくれたんだよ。女が自腹切ったんだよ。それっていい女だったんだよ。その女をお前は裏切った」

俺はそう言われて、初めて気がついた。「だからホテルにしたのよ」という女の声が瞬間聞こえた。そうして「ビジネスホテル・アプリコット」という看板が一瞬浮かんで消えた。

「お前は女の善意を裏切ったことになるんだ」

「じゃあ、お前が俺の立場だったらどうするんだよ？」

「俺か？ もちろん俺はゴムなんか要求しないよ」

「もし性病にかかったら？」

「仮にだぞ、仮にかかったら、仕方がないさ。諦めるさ、

これも運命だと思つてね。それから友人に金の工面を頼んで病院通いさ」

俺は黙りこんだ。そんな病気を自分の体に抱え込むことを想像するとぞっとした。第一、性病にかかったら、病院代はどこから調達するんだ？ と思つた。俺の不安を読み取つたのか、友人は言つた。

「お前な、そんな状況で性病にかかったら、友人が金は貸してくれるよ。俺だつてお前が治療代を貸してくれと言つたら、喜んで貸すよ」

「どうしてだよ？」

「それつてまさに男気のある行為じゃないか。みんなその男気に惚れ込んで貸してくれるさ。人生つてのはだな、疑うばかりじゃ駄目なんだよな。ここぞと思うときは、自分の人生をすべて賭けるつてことも大切なんだ」彼は自信満々に言つた「そんなんじや、お前は一生女にもてないぞ」

俺は彼の言うことに半信半疑だった。多分付き合いがあるというヤクザの世界の事を言っているのだと思つた。しかし、もし俺の友人がそういう事態に遭遇したとき、治療代を貸してくれと言つたら？ と考えてみた。この経緯も言わないで貸してくれというのであれば俺は貸さないだ

ろう。しかし、俺の経験したような事情があったとしたらどうなんだろう？ 俺は思つた、俺だつてやはり、貸すだろう。なぜ？ やはりその女への思いやりに感激してのことだろう。俺は自分を説得するように頷いた。

俺は女の悲しげな顔を思い出すと、一人の女の人生を踏みにじつたような気がして心が痛んだ。

五.

俺はしばらくアパートの部屋に閉じこもつて過ごした。

部屋は管理人兼家主のG氏が掃除をしてくれていたので綺麗だった。G氏に挨拶に行くと、「罪滅ぼしをしたんだから、青天白日になったんだよ。しばらくは休んでいいが、仕事も見つけないとね」と言つた。俺は「うん、そうしますよ。そうしないと食えないからね」

「俺にできることがあれば協力するからなんでも言つていいよ」彼はそれ以上何も言わなかった。彼は無口だったが親切だった。相談を持ちかけると、いろいろアドバイスをしてくれた。俺がいない間の一切のことを処理してくれた。俺は彼に感謝した。

アパートの一室で、何もしないでゴロゴロして過ごしたが、とても退屈だった。テレビを見て、夕方散歩に行つて居酒屋で一杯引つ掛けて、という暮らしが続いた。

俺は一週間ほどしてハローワークに行った。「俺は前科

者だ。だから高望みをしてはいけない」と内心自戒しながらパソコンの前でネット検索をした。いろいろ求人票を物色したがこれといった仕事は見つけることができなかった。ハローワークに来る人間は独特の表情をしている。やはり生活が掛かっているからだろう。つまり、明日の食事にありつけるかどうかの、際どい状況にあるからだ。俺は、ハローワークを歩き来している求職者の異様な雰囲気の様子を目にしなが、街へ出た。

俺の足は自然とK子が働いている喫茶店「スカイブーク」へと向かっていた。店は通天閣の近くに位置していた。左にちよつと離れたところにはサウナ兼ホテルというビルがあった。「二十五時営業」という大きな看板が見えた。レストランは俺の予想に反してこじんまりとしていた。風俗店とは全く違っていた。

俺が中に入っていくと、K子が驚いたような表情をした。「いらつしやいませ」と言うK子の表情は完全にウェイトレスのものだった。風俗店のK子とはそこにはなかった。昼に近い時間だからだろうか、結構客が入りしていた。K子は俺が注文したイタリアン・スパゲッティを持ってくると、そつとメモ紙を置いていった。「午後六時に通天閣そばの売店で待って」と書かれていた。

俺はひと声かけたかったが、K子が避ける気配を見せたので、一言も話を交わすことなくそこを出た。まだ六時ま

では時間がある。どこか行って行く当てはなかった。俺は時間つぶしに阪堺電車に乗った。阪堺線の運賃は一律二百円である。

俺は大小路駅で降りた。そこには与謝野晶子生家跡の碑がある。大通りの歩道にポツリと立っている。俺は、初めてこの生家跡の歌碑を見たとき、とてもショックを受けた。余りにもぼつねんと誰から見放されているように思えたからだ。晶子の生家は今の大通りの真ん中に位置していたんだということを近くの会社の女性社員から聞いた。歌碑はその大通りの歩道に建立されている。与謝野晶子ファンなら誰だつて、その歌碑の怪しい佇まいに、「どうして？」と言いたくなるだろう、と思った。

俺の好きな歌「柔肌の熱き血潮に触れもみで寂しからずや道を説く君」は生家の歌碑にはない。女性社員の話では、この歌の碑は高野山奥の院の歌碑にあるということだった。俺はこの歌を思い出しながら、ふとK子を思い浮かべた。K子が与謝野晶子とオーバラップした。ふたりが似通っているように思ったのだ。どこがといつても、それはわからない。俺も不思議な気がした。片や有名な歌人、一方は風俗店で働いていた女。俺はその関連を見つけることができなまま、歌碑を離れた。でも二人はやはり似たところがあると、俺は思った。

売店に入っていくとK子は既に来ていた。

「待たせたわね。退屈だったでしょ？ どこに行っていたの？」

「阪堺電鉄の大小路駅だよ」

「あら、与謝野晶子の生家跡？」

俺は黙って頷いた。

「あなたが来るとは思っていなかったのよ。だから、あなたと何を話しているのか、戸惑っているの」

「なんとなく来たんだ。別にこれといった要件はなかったんだ」

「でもあなたから会いに来るって初めてよ。いつも私が誘っていたからね。だから少し、うれしくて慌てているのよ」俺はK子を見つめた。どこにも風俗店の雰囲気はなかった。不思議な気がした。じつは俺にも話すことがなかった。

コーヒを飲む時の匙とコップの触れる音だけが聞こえた。沈黙が続いた。俺はその沈黙を破るように話しかけた。

「与謝野晶子の生家跡の歌碑を見ていたら、ふと、あなたを思い出したんだ」

「あら、どうして？ 私って歌人でもないのに」

「俺にもわからない」

「でも光栄だわ、晶子と私があなたの頭に浮かんでくるなんて・・・」K子はくすくすと笑った。

「私の過去を聞かれるかと思つたわ。今日はどうして？聞かないの？」

「あなたの過去に興味をなくしたらしい。そんな意欲がわなくなつたんだ」

「あら、そう？ でもそれはいいことだと思つたわ。過去をまさぐるってことは自分から悪魔を呼び戻すことなのよ」

「悪魔？」

「そうよ、悪魔がおかしければデビルに言い換えてもいいわよ」

「悪魔って、あなたは信じてるのか？」

「信じてるわ。なぜかって、人間って善と悪の間を歩き来しているのよ。その悪がつまり悪魔なのよ。悪魔の存在があつて初めて人間は、善を追い続けるってことなのよ」

「じゃあ、善は人間の前方にあつて悪魔は後方に存在するってこと？」

「そう考えてもいいわね」

俺は無然とした。ソーブランドの女から人間の生き方を教わろうとは思ひもなかったのだ。俺はK子の顔をまじまじと見た。K子は窓の外を見ていた。その横顔は美しかった。一点の汚れもなかった。「じゃあ、俺にそんな事をいいながら、どうして風俗店に身を潜めたんだよ」と言いたいのを必死で我慢した。

六、

俺は管理人室に立ち寄った。家賃を払うためだった。2

LDKには二畳ほどのキッチンが付いている。狭間なのでかなり狭く感じられる。G氏が俺が入ってきたのを見て、尋ねた。

「どこへ行っていったんだね？ 久しぶりの散歩かね？」

「うん、ちよつと街へ出て、知人と会ったんだよ」

俺は今日K子とのやり取りを話した。

「あんた、その子が好きなの？」

「いや、単なる知人だよ」

「それにしても、呼び出して会うなんて、知人の域を超えているよ。もっと関係が深いんだろう？」

そう問われて、俺はK子と出会ってからの経緯を簡単に話した。

「それじゃあ、ほとんど恋人同士だよ」

俺は「違う」と言いたかったが、あまりに断定的に決めつけられて、何も言えなかった。

「あんたね、その子が好きなんだけど、風俗店にいたことがあんたの心の重荷になってるんだらう？」

俺は慌てた。凶星を突かれたからだ。俺は黙ってテーブルの端の引っかかり傷を見つめていた。

「いずれにしろ、どちらかに決めないとね。あんたがグズグズしていると、女のほうに去っていくよ。女もしつかりものよだからね」

「あなたが言うように風俗店にいたってことが、気になる

んだよ」

「そうだろうな、男なら誰だって一度は逡巡するよな」

「Gさんならどうするの？」俺は尋ねた。

「そうさなあ、しばらくは悩むよなあ。あんたと同じだよ」

G氏は頭をかしげて考える様子だった。

「俺はあんたのように過去を問うことはしないよ。意味がないもの」

「でも過去を知ることはその人間を知るには必要だよ」

「確かにそうは言えるね。『過去から未来へ』と言った学者がいたけどね。でもね、この学者が言ったのは人間個人に関してじゃないと思うんだ」

俺は今日K子が言ったことを話した。

「あれ、その子、いいこと言うじゃないか。俺の考えと同じだよ。集団であれば個人の意思も制約され中和されるけど、一人の人間ではその人の意思によってベクトルは変幻自在なんだ。過去を知ったからその人間が特定されるものでもないと思う。だからその女が、過去を追うことは悪魔を追うことと同じだと言ったことは正しいよ」

「じゃあ過去は放置する、問わないということ？」

「そうだね。その子が言った『人間には知る必要がないこともある』っていうのは、聞いたことがあるね。そうだ、聖書にもあるんだよ」

俺は、聖書と聞いて、G氏を凝視した。G氏が急に大き

く見えた。「フラワー・ポット」のK子の姿が翳みはじめた。俺はしばらく考え込んだ。

「女はね、『あなたが過去を問うたとしても相手が嘘を言う場合もある。真実でない場合もある。だから意味がないんじゃないか？』ってあんたに問いかけていたんだよ」

俺は、G氏の言に頷いた。

「事実を言っても、それが果たして真実なのかは誰もわからないよ。本人さえも誤解しているかもしれないからね。その子が言ったというけど、あらゆるものはその全てを知り尽くすことはできないんだ。その子が言ったとおりだよ」「じゃあ、現在から、つまり今あることからスタートせよってこと？」

「そうだね、それが一番いいと思うよ。それから一番あんたが気になっていること、つまり風俗店に勤めていたっていうことを、あんたはさも社会に反することだと思ってるよ。ただ、これもあんたの我がままとも言えるんだよ。男は性的欲望を満たすことは構わないが、女は駄目だったのがあんたの考えなんだよ。これって理不尽だよ。男の身勝手だね」

「じゃあどうすればいいのよ？」

「今の女をそのまま受け入れることだね。無条件にだね。それ以外に方法はないよ。女の生き方って、一直線だからね。作家のU・Cだって、男から男へと渡り歩いたんだし、

H・Fだってそうだし・・・あんたのその女と生き方はあまり変わらないんじゃないのかな？」

そう言われて、俺は思い当たることがあった。俺は夭折した詩人N・Cのことを思い出していた。彼は好きだった女性と同棲した。ところが女はN・Cを捨てて評論家K・Hに走った。やがて彼とも分かれて男性を転々とした。それでも捨てられたN・Cは死ぬまでその女に尽くし続けた。「俺がふと思いついた与謝野晶子とK子がオーバーラップしたことも、理由がないわけではないんだ。生き方は同じなんだ。G氏が言った女流作家もK子と同じ女なんだ。K子の過去を調べてK子の現在と過去を整合させようとしたことが間違いないんだ。俺はN・Cのように生きればいいんだ」

俺はだんだん視界が開けてくるのがわかった。よし、今度K子に会ったら、俺のこの気持ち伝えよう。K子は必ず理解してくれるだろう。俺の中に熱い血潮が流れるのを感じた。それは俺に明日への希望を抱かせるエネルギーだった。

俺だって、男気はあるんだ。俺だってシンドニー・カートンになれるんだ。そう思うと急にK子がいとおしくなった。

「人間には知ってはいけないこともあるんだ」

俺はこの言葉を何度も何度も繰り返していた。